

報告番号

※

第

号

主 論 文 の 要 旨

論文題目

世紀転換期のグスタフ・クリムトにおける身体表現と素描：
ウィーン大学、講堂の天井画を中心に

氏 名

前田朋美

論 文 内 容 の 要 旨

ウィーン世紀末を代表する芸術家、グスタフ・クリムト(1862-1918)は 1894 年にウィーン大学、講堂、天井画《哲学》、《医学》、《法学》の制作依頼を受け、およそ 10 年の歳月をかけて取り組んだ。これら 3 作品は総称して「学科絵」と呼ばれ、それ以前の作品とは大きく異なる表現を試みているだけでなく、制作を通じて描写様式を変えながら自身の描き方を確立させるに至るクリムトの画業の中心的な作品である。ところが、学科絵に関する先行研究は、描写様式の変化を指摘しつつも、モチーフの源泉の追求、同時代のショーペンハウアーやニーチェ哲学に基づく解釈、そして作品の賛否両論を巡る当時の論争に分析に偏り、描写形態の分析を通じて、その変化を引き起した画家の制作時における関心や素描の役割について追求されることはなかった。学科絵は多種多様な人物像によって構成され、そこに見られる身体表現はその後のクリムト作品の核となる要素である。そのため、学科絵の制作に際して生じた画家の身体表現への強い関心の所在を明らかにする必要がある。このような研究の現状に対して、筆者は大量に残された人物素描を手掛かりに、そこから素描のあり方、そして制作時におけるクリムトの関心を明らかにすることを試みる。クリムトは作品ごとに準備素描を制作しており、それは制作過程を示す重要な研究資料だが、学科絵では、それ以前とは異なって完成作品に対応しない素描が多数存在している事実がそなえる意義は考慮されず、素描と完成作の間で類似するモチーフを比較、検討する以上の考察はほとんどなされてこなかった。本論では、学科絵以前の作品として寓意図版集「豪華画集 1」(1882-84)、ブルク劇場、階段の天井画(1866-88)、《旧ブルク劇場の観客席》(1888/89)、ウィーン美術史美術館の壁画(1890-91)、学科絵《医学》(1894-1907)、《ベートーヴェン・フリーズ》(1902)、そして学科絵《法学》(1894-1907)の順で取り上げ、人物像の形態分析を通じて明らかとなる素描の特徴と素描と完成作の関係のあり方、そして作品ごとに素描が果たした役割を分析することにより、1900 年頃に生じたクリムトの関心を明らかにすることを目指す。

1 章ではグスタフ・クリムトの画業や世紀末における当時の状況に触れ、クリムトを取り巻く環境を踏まえた上で、2 章以下、具体的に作品を挙げて考察を加える。2 章では、初めにクリムトが工芸学校時代に制作したいくつかの素描作品を取り上げて、工芸学校におけるアカデミックな素

描教育がクリムトの素描の基礎を形成している点を確認する。そして、比較的まとまって素描が残されている寓意図版集「豪華画集 I」から画業最初期における素描の役割を考察する。クリムトは伝統的なアカデミックな描き方に従って素描を制作し、素描は制作に必要な下書きとして機能していた。3章では、ウィーン市内の主要な建築を飾るブルク劇場、階段の天井画、《旧ブルク劇場の観客席》、ウィーン美術史美術館の壁画を取り上げる。これらの作品の制作依頼はクリムトが若手芸術家として実力が認められたことによるものであり、それ以前とはクリムトの画家としての立場が異なっていた。しかしながら、これらの作品に付随する素描は基本的にアカデミックな描き方をしており、簡略化された人物描写でも完成段階の人物像と一致する。ここでの素描の役割は完成段階のために人物描写を調整し、確認する、そして人物像のポーズの型として利用する場であり、前章での素描の役割と基本的に共通している。この素描のあり方が大きく変化したのが4章にて取り上げる学科絵《医学》である。《医学》では素描が、画家が制作に際して生じた関心を追求する、思考の場へとそのあり方を変え、それに伴い素描数も劇的に増加した。クリムトは多種多様なポーズを取る人物像を多彩な角度から捉えること、人体描写の可能性に関心を寄せて人物素描を繰り返し、それゆえ準備スケッチや完成作に該当しない素描も制作した。そして完成作では老若男女が重なって流れを構成する人物群となり、クリムトは《医学》において人間の歴史、死や生という主題を多様な身体表現によって描き出していた。また、多種多様なポーズへの関心から、クリムトはマイブリッジの連続写真に接触し、ダンスを含む様々な運動が生み出すポーズに触れている。続く5章では、学科絵《医学》と《法学》の間に制作された《ベートーヴェン・フリーズ》を取り上げる。《ベートーヴェン・フリーズ》では、次の《法学》においても同様に、《医学》で確立された素描のあり方、そして身体描写への関心、身体表現によって人間の歴史、あるいは生や死という主題を描くという点が継承されている。しかし《ベートーヴェン・フリーズ》の人物素描は完成段階、あるいはそれに近い状態にて描かれていることから、多様な人体のポーズではなく、線の多様性に関心を向けて身体描写を繰り返していたことが明らかとなる。最後に6章にて扱う《法学》では、《ベートーヴェン・フリーズ》の直後に制作され、そこでの成果を受け継ぎつつも線の多様性からは離れて、ダンスに強い関心が向けられていたことが素描から明らかとなる。クリムトは《医学》、そして《ベートーヴェン・フリーズ》の制作を通じてダンスに少しずつ関心を寄せていたと推測されるが、《法学》においてそれが明確になる。クリムトのダンスを通じての身体表現は、同時代のモダン・ダンスの展開、特にそこでの身体言語の可能性に呼応したものである。それゆえモダン・ダンスから生み出されるポーズは単なる形態の手本ではなく、苦しみや恍惚といった人間の様々な感情、そして生や死を表現する身体言語であったことを同時代のF.ホドラーの作品を参考に考察を加える。

以上の考察により、クリムトは学科絵、および《ベートーヴェン・フリーズ》を制作していた1900年頃に人間の歴史、あるいは生や死という主題に関心を寄せ、それを身体表現によって表現することを試みていたこと、そしてその身体表現を追求するために、学科絵以前の作品とは異なる素描のあり方を確立したことが明らかとなる。